



Title	喉頭癌発癌母地に関する病理組織学的研究（発癌の場としての価値考察）
Author(s)	山田, 康之
Citation	大阪大学, 1975, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/31425
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名・(本籍)	山 田 康 之
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	第 3 4 7 0 号
学位授与の日付	昭 和 50 年 10 月 6 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当
学位論文題目	喉頭癌発癌母地に関する病理組織学的研究 (発癌の場としての価値考察)
論文審査委員	(主査) 教 授 内 藤 僞 (副査) 教 授 岡 野 錦 弥 教 授 宮 地 徹

論 文 内 容 の 要 旨

〔目 的〕

喉頭の悪性腫瘍の99%は扁平上皮癌である。しかし、喉頭癌発癌母地を問題とする場合、喉頭の上皮は、重層扁平上皮と多列線毛上皮とが複雑に分布しているので、この両上皮の分布や扁平上皮化生が重要な課題となってくる。今までこのような観点から、喉頭全体を形態学的、組織学的に把握しようとする研究は殆ど行なわれていない。その理由は、発癌母地としての喉頭全体の上皮組織を検討することが、技術的に煩雑であり、また、多数標本の検討には、おのずから限界があるからであった。

著者は、喉頭癌発癌母地を研究する目的で、喉頭全体を用いた Stellらの大染色法により、重層扁平上皮と多列線毛上皮とを染別し、扁平上皮化生の病理組織地図を作り検討した。さらに、これらの喉頭上皮を病理組織学的に観察した。

〔方法ならびに成績〕

研究対象として、160の人体喉頭を用いた。その内訳は、喉頭癌のため全摘出された喉頭101, すなわち、声門部癌群45, 声門上部癌群56, および剖検屍より得られた非癌喉頭で肉眼的に正常と思われるもの59 (以下、対照群と称する) であった。

I Stellらの報告した臓器大染色法(2種類の方法がある)により、喉頭全体の上皮を重層扁平上皮と多列線毛上皮に染別した。この方法は、一つは、pyronin Yにより、多列上皮を赤染し、扁平上皮を未染のまま残す方法であり、他の一つは、alcian blue および phloxine により、扁平上皮を濃いピンク色に、多列上皮を濃青色に染める方法である。これらの方法を用い160の喉頭を染色していた結果は、次の通りであった。

1. 声門上部の扁平上皮化生は、殆んど化生のみられない型からほぼ全域にわたり化生した型まで認められ、これを次の五段階に分類した。すなわち、Ⅰ型(小児化生型)、Ⅱ型(辺縁部化生型)、Ⅲ型(島嶼状化生型)、Ⅳ型(高度化生型)、Ⅴ型(全化生型)である。また、声門下腔の化生の型としては、声帯と繋る連続化生と、声帯と非連続で飛地状に化生した島嶼状化生を認めた。

以上の分類にしたがって検討し次の成績を得た。

2. 対照群においては、声門上部の化生は aging とともに進展していた。60才台で最も多い化生の型はⅢ型であった。

3. 声門上部癌群では、対照群や声門部癌群よりも、声門上部の化生は進展していた。この群で最も多い化生の型はⅤ型であった。

4. 声門部癌群では、対照群より声門上部の化生がやや進む傾向がみられた。この群で最も多い化生の型はⅢ型であった。

5. 腫瘍の進展によって発癌母地の扁平上皮化生は進展しないことを認めた。

Ⅱ さらに、これら160の喉頭のうち対照群17、声門部癌群12、声門上部癌群18の計47の喉頭を病理組織学的に検討した。各喉頭を幾つかの大ブロックに分割し、ツェロイジンまたはパラフィン包埋のうえ連続大切片を作製し、ヘマトキシリン・エオジン重染色、エラスチカ・ワンギーソン染色、アザン染色(Heidenhainの変法)を行ない観察した。その結果は次の通りであった。

1. 前述の臓器大染色法で得られた所見に一致した組織所見を得た。

2. 扁平上皮と多列上皮の境界部に両上皮の中間的形態を示す上皮を認めた。

3. 喉頭蓋上半部の上皮は扁平上皮であることが多く、下半部では、多列上皮と扁平上皮が複雑に入り雑じっていた。声門上部の化生上皮の多くは、安定化生像を示していた。また、喉頭室は常に安定した多列上皮であった。

4. 声帯の上皮は、肥厚した扁平上皮であり、所々に乳頭を形成していた。ω型肥厚、柵状肥厚、carcinoma in situ などの異形上皮ないし悪性像をみることがあった。これらの所見は声門部癌群の対側非癌部声帯に目立った。

5. 多列上皮の部分では、basal cell hyperplasia の傾向はみられなかった。

6. 対照群よりも声門部癌群、さらには、声門上部癌群の方が上皮の病的所見が多くみられた。ただし、声帯に関しては声門部癌群の方が病変が高度であった。

7. 異形上皮として、単純結節状肥厚、ω型肥厚、柵状肥厚、不穏上皮を認めた。

8. 多中心性発癌を30例中3例(10%)に認めた。

〔総括〕

これらの成績をもとに、著者は、喉頭の機能の面も考慮して、喉頭癌発癌母地について検討を加えた。

その結果、声門上部癌と声門部癌では発癌要因が異なると考えられ、声門上部癌では、声門上部の化生が発癌のための重要な因子であると考えられた。

論文の審査結果の要旨

喉頭の悪性腫瘍の99%は、扁平上皮癌であるため、喉頭における扁平上皮化生が発癌に大きく影響すると考え、本研究では先ず Stellらの大染色法を用い、喉頭癌患者および正常者の喉頭の扁平上皮化生の様相を検討した。化生の状態により声門上部のそれを五つの型に、声門下部のそれを二つの型に分類した。正常者の化生は年齢と共に進み、喉頭癌群では正常者よりさらに化生が進行して居り、特に声門上部癌では声門上部の化生が著明であった。一方、喉頭癌の進展が化生を促進しているのではないことも知った。

次で、喉頭上皮を光学顕微鏡的に検索し、各種の組織的異形像は扁平上皮部にのみ見出され、かつ正常群より癌群の化生部に多く、特に声門部癌群に多く存在することを知った。また、多中心性発癌が10%も存在することも分った。

本研究は喉頭癌発癌の今後の解明に対して、まことに興味深い成績を提供しているものとする。